

## 子どものテレビ視聴の実態と「ノーテレビ」の課題

### - 「ノーテレビ」に取り組む地域の子どもの生活調査をもとにして -

遠藤 宏美\*

#### 1. はじめに

本稿は、「ノーテレビ」に取り組もうとする、ある地域の子どもたちを対象に実施した質問紙調査のデータにもとづき、子どものテレビ視聴の実態と「ノーテレビ」に対するかまえを探り、今後の「ノーテレビ」の取り組みの見通しと課題について、考察しようというものである。

「ノーテレビ」とは大まかに言えば、2000年以降に各地で行われ始めている、地域や学校などの単位で「テレビを見ないようにしよう」という取り組みである。周知のとおり、テレビやテレビゲームなどの映像メディアによる子どもの発達の危機は、従前より問題視されてきた。しかし、パソコンや携帯電話を含む多様なメディアが急速に普及し、それらなしでは生活が成り立たないほどに根づいてしまったため、それらから子どもを遠ざけようとする、現実的かつ具体的な方策に欠けていた。また、子どもたちとこれらのメディアとの接触については、各家庭の子育ての方針の問題とされる部分が多く、そのため各家庭を超えて問題視されにくくなっていたともいえよう。

しかし、近年の小児科医や脳科学者、教育学者などの研究成果により、メディア接触が子どもの発達に悪影響を及ぼしていることが次第に明らかになってきた。にわかに子どもとメディアとの関わりについての全国的な関心が高まり、保育園や幼稚園、小学校などで「ノーテレビ(テレビを見ない)」や「ノーゲーム(テレビゲームをしない)」の取り組みが始まった。自治体レベルでも取り組みが検討され、実施に移されている市町村もあることが報告されている(日本子

どもを守る会編 2004, 2005)。

ところで「ノーテレビ」の試みは、取り組んでいる地域や団体、自治体によって、内容が異なっている。具体的には、「テレビを見ない日(時間)」の頻度や時間(「月1日」「週1日」「1週間」「食事中」など)や「ノーテレビ」に挑戦する人の範囲(「子どもだけで」「親子で」「家族全員で」など)、接触しない対象として設定するメディアの範囲(「テレビのみ」「ビデオやテレビゲームも含むすべての電子映像」など)の点で、バリエーションが見て取れる(日本子どもを守る会編 2004, 2005)。しかし、ほぼ共通しているのは、一定の時間、映像メディアとの接触を断ち、他の活動に取り組もうということである。ただ単純に、テレビを消せばよい、ゲームをやめればよい、というのではなく、その代わりに時間に他の活動をするに「ノーテレビ」の意味があるとされている。とはいえ、テレビ漬けになっている現代の子どもたちが、テレビを見ない生活を送ることができるのか、あるいはテレビを見なくなった場合にどのような活動ができるのか、といった不安な声を耳にすることも少なくない。

上記のような流れの中で、「ノーテレビ」の試みを村全体で取り組むこととなったのが、X村である。X村では、「ノーテレビ」の本格実施を前に、村の子どもたちの生活や行動についての基本データを得るための調査が企画された。本稿ではこの調査をもとにしている。

いったい、今の子どもたちはテレビとどのようにかかわっているのだろうか。具体的には、どのくらいの時間、また、どのような態度でテレビを視聴しているのだろうか。テレビとのかかわり方は、子どもたちの行動とどのように

\* 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科

関係しているのでしょうか。さらには、「ノーテレビ」の試みは子どもたちにどのように受け止められているのでしょうか。「ノーテレビ」は当初の計画どおりに実行が可能なのでしょうか。実行可能でないとしたら、どのような取り組みが必要なのでしょうか。本稿では、調査結果に基づいてX村の子どものテレビとのかかわりの実態を明らかにし、その結果をもとに、X村における「ノーテレビ」の取り組みの方向性を考えていくこととする。

## 2. 本調査の位置づけ

### (1) X村における「ノーテレビ」の試み

X村は、関東地方に所在する、人口約35,000人の比較的規模の大きな村である。2000(平成12)年に「のびのびと正しく、瞳かがやく青少年を育てるまち」宣言を行い、青少年の健全育成を誓ったX村は、翌年、村長を委員長とし、さまざまな団体を推進委員のメンバーとする「青少年宣言推進委員会」を発足させ、組織的な活動を展開しはじめた。その中で、具体的な行動計画の作成にあたり村民に対して行った意識調査の結果、2002(平成14)年度から完全実施となる学校週5日制を前に、子どもたちの休日の過ごし方についての問題が浮き上がってきた(X村青少年宣言推進委員会 2003)。

そこでX村では、2003(平成15)年に策定した「青少年育成プラン」において、子どもたちの土曜日の過ごし方に焦点を当てた。そして、いくつもの計画を並べるのではなく、ただひとつ「今、できること」として実行可能なプランを掲げることとなった。それが、2004(平成16)年度から実施することとなった、「ノーテレビ」の取り組みである。

X村における「ノーテレビ」の内容は、「毎週土曜日はテレビを見ないようにし、家族やグループで過ごそう」というものである。「ノーテレビ」に取り組む他の地域では月1日の実施が多く見られるのに対し、X村では毎週1日、しかも土曜日に「ノーテレビ」を設定したところにポイントがある。なぜなら、職場の週休2日制の普及ともあいまって、土曜日に仕事を休める

ようになった親をも巻き込んで「ノーテレビ」を実施することで、子どもたちが家族と共に行動したり、家族そろって地域活動へ参加したりすることができるように目論まれているからである。

また、他の地域では学校単位、家庭単位など、比較的小規模で「ノーテレビ」の取り組みが実施されることが多いのに対し、村をあげて行うことになったことも、X村の「ノーテレビ」に特徴的な点である。「村をあげて」取り組むことになったのは、青少年育成の責任は各家庭だけにあるのではなく、学校や地域、職場にもあるとの考えに基づき、村はそのための支援をすべきであると判断されたためである。あるいは、そうしないと「ノーテレビ」が各家庭で確実に実行されないと危惧されたためでもある。

X村の場合、「ノーテレビ」とはいうものの、ただテレビを断てばよい、というわけではない。X村の試みは、誰にでもすぐに実行できることとして、「テレビを見ないこと」が挙げられているだけであるが、目指されているのは、映像メディアとの接触の代わりに、他人と触れ合う時間を増加させることである。すなわち、子どもたちが、土曜日が休日となることで家庭にいることが多くなった大人と共に、その日を「ノーテレビ」で過ごすことによって、多様な人間との多様な相互行為を行うことができるようにすること、それが本来の目的なのである。こうした目的のもとに実施されるX村の「ノーテレビ」では、この試みによって、子どもたちの他人に対する関心や信頼が培われていき、最終的には「思いやりのある子」に育っていくことが想定されている。X村の「ノーテレビ」が目指すのは、「思いやりのある子」の育成なのである。

X村での「ノーテレビ」の取り組みは、強制ではなく各家庭での判断に実施が任されている。しかし村では、街中に「ノーテレビ」を呼びかけるノボリ(旗)を掲げたり、街頭放送によって広報活動を行ったりするなど、さまざまな形で取り組みの周知につとめている。また、別途、「2歳までは完全ノーテレビ」「2歳以上は時間を決めてテレビ視聴」など、就学前の子どもを

持つ親への啓発運動も行われており、まさに村をあげてのプロジェクトとなっている。

## (2) 本調査の概要

この調査は、「いつもの生活についてのアンケート」(小学生対象)および「日常の生活時間と生活活動についての調査」(中学生・高校生対象)として、筆者らが実施したものである<sup>(1)</sup>。既述のように、X村では2004年度より、「毎週土曜日はテレビを見ないで、家族と一緒に過ごそう」という「ノーテレビ」の実施を始めた。そこで、その直後において、テレビ視聴などをはじめとした子どもたちの日常生活の実態を全体的に把握し、今後の取り組みにおけるベンチマークを得るために、本調査を計画した。なお、同様の調査は、今後3年ごとの実施が予定されている。

本調査は、2004年4月、X村すべての公立学校(小学校6校、中学校2校)に在籍する児童・生徒全員と、X村に所在する県立高校1校の生徒全員を対象とする悉皆調査として実施された。実施の方法は、X村が各学校に実施を依頼し、各学校で児童・生徒に集団記入あるいは持ち帰りによる記入を行わせるという方法がとられている。

なお、調査票は、学年段階に応じて、質問項目の数を加減したり、ワーディングを工夫したりするなどして、「小学校1・2年生用」「小学校3～6年生用」「中学・高校生用」の3種類を作成して実施した。以下では、このうち、X村外から通学している生徒が80.7%と多かった

高校生のデータを除き、小学生および中学生、計2,499名分のデータの分析結果を示していくこととする。本稿で扱うデータの、学年別および性別による回答者の基本属性は表1-1および表1-2に示したとおりである<sup>(2)</sup>。

## 3. 子どものテレビ視聴の実態

それでは、調査結果に基づき、「ノーテレビ」実施直後における子どもたちのテレビ視聴の実態を探っていこう。

### (1) テレビ視聴時間

まず、子どもたちのテレビ視聴時間について見てみよう。調査では、平日の帰宅後にテレビを見た時間と、土曜日にテレビを見た時間とを尋ねている。表2によれば、平日・土曜日ともに、学年段階が上昇するにつれ、テレビの視聴時間が長くなっていることがわかる。平日では、小学校1・2年生と中学生の間に46分の差がある。土曜日ではさらにその差が開き、73分にもなっている。

平日に着目すると、小学校5・6年生の約半数、中学生の約6割がテレビを2時間以上も見ていることがわかる。土曜日の平均時間を見ると、小学生ではどの学年段階でも平日より40分程度視聴時間が長くなっている。さらに中学生の土曜日の平均視聴時間は、平日に比べ60分以上も長くなっている。その結果、中学生では半数以上が、土曜日に3時間以上もの長時間にわたってテレビを見ていることとなっている。ここに、X村が土曜日に「ノーテレビ」を設定した理由が窺える。しかしこのような状態は、

表1-1 回答者の基本属性(学年別)

小学校 (6校)	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
	331名	311名	319名	348名	321名	296名	1926名
	17.2%	16.1%	16.6%	18.1%	16.7%	15.4%	100.0%
中学校 (2校)	1年生	2年生	3年生	合計			
	259名	173名	141名	573名			
	45.2%	30.2%	24.6%	100.0%			

表1-2 回答者の基本属性(性別)

男子	女子	無回答	合計
1218名	1269名	12名	2499名
48.7%	50.8%	0.5%	100.0%

裏を返せば、「ノーテレビ」を「毎週土曜日に」実施しようとする事の難しさでもある。ここから、X村における「ノーテレビ」の試みがジレンマを抱えることが予想される。

### (2) テレビ視聴の際の態度

次に、子どもたちがどのようにテレビを見ているかを、いくつかの質問への回答からみていこう(表3)。どの学年段階でもほぼ一定の割合を示しているのが、「家族の誰かと一緒に見ている」という視聴の仕方である。9割近い値を示していることから、おそらく、リビングルームやダイニングルームなど家族が集まる場所にテレビが置いてあり、一緒に見る機会が多いことが窺える。しかし一方で「一人で見ている」割合も少なくなく、特に中学生の3割以上が該当する。この調査では、テレビを置いてある場所までは問うていないため、自分の部屋にテレビを所有して一人でもって見ているのか、

単純に家族がそろわずに結果的に一人で見る機会が多いだけなのか、そこまでは知りえない。しかしながらいずれにせよ、一人でテレビを見ているのであれば、テレビ視聴を通じて他人との相互行為が行われているとは考えにくい。

また、学年段階が上がるにつれ、「だらだら見ている」割合や「勉強をしたり食事をしたりしながら見ている」割合が増加し、「決まった番組だけを見ている」割合は減少している。つまり、低学年のうち、決まった番組だけを集中して視聴しているようであるが、学年が上がるにつれ、何かをしながら、特に見る番組も決めずにだらだらと見続ける傾向が見受けられる。これには、年齢上昇にともなう家庭内でのしつけの仕方の変化や、子どもたちが興味を持つテレビ番組の増加が影響していると考えられる。

### (3) 「ノーテレビ」に対する評価

調査では、X村が本格的に実施を始めた「ノ

表2 平日の帰宅後および土曜日におけるテレビ視聴時間(学年段階別)

	平日の帰宅後にテレビを見た時間					土曜日にテレビを見た時間				
	0分～1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上	合計(%)	平均(分)	0分～1時間未満	1時間半以上3時間未満	3時間以上	合計(%)	平均(分)
小学校1・2年	23.3	44.9	31.8	100.0	79	37.4	35.6	27.0	100.0	119
小学校3・4年	23.9	38.4	37.7	100.0	87	36.4	31.5	32.1	100.0	129
小学校5・6年	18.7	30.1	51.2	100.0	107	29.9	32.4	37.7	100.0	152
中学校	12.4	26.7	60.9	100.0	125	16.0	30.8	53.3	100.0	192
全体	19.9	35.4	44.8	100.0	99	30.4	32.6	37.0	100.0	147

表3 テレビ視聴の際の態度(学年段階別)

	テレビを見るとき・・・ (%)					
	だらだら見ている	決まった番組だけを見ている	ビデオにとって、後で見ている	一人で見ている	家族の誰かと一緒に見ている	勉強をしたり、食事をしたりしながら見ている
小学校1・2年(N=642)	31.0	73.1	24.1	18.2	87.2	42.1
小学校3・4年(N=667)	36.4	69.3	25.2	20.2	88.9	48.1
小学校5・6年(N=617)	42.5	66.6	27.2	25.6	85.4	54.3
中学校(N=573)	52.2	62.3	30.9	34.9	85.3	59.9
全体(N=2499)	40.1	68.0	26.7	24.4	86.8	50.8

注) 「そうしている」(「いつもそうしている」+「ときどきそうしている」の合計)の値。

「ノーテレビ」の試みについて、評価を求めている。表4はその結果を示したものである。全体の値を見ると、土曜日にテレビを見られなくなることについて、「困る」という評価が全体の約4分の3を占めている。どれだけ子どもたちにとってテレビがなくてはならないものになっているかが、容易に推測されよう。質問のワーディングが必ずしも適切ではなかったため、その意味解釈が難しくはあるが、「つまらない」「不安だ」といった否定的な評価を下した子どもの割合も比較的高い。その一方で「よいことだ」「楽しそう」という肯定的な評価の値は低い。このことから、子どもたちは概して「ノーテレビ」の試みを否定的に感じていることがわかる。

学年段階別に見ると、「困る」「つまらない」「不安だ」といった否定的な評価は、学年の上昇とともに増加傾向にある。反対に「よいことだ」「楽しそう」といった肯定的な評価は、学年の上昇とは逆に値が減少している。特に中学生の多くが「困る」「つまらない」と回答し、ほとんど「楽しそう」だと思っていないことから、「ノーテレビ」の実施に際しては、特に中学生の反発が予想される。

ここで注目したいのは、「なぜそんなことをするのか、わからない」という項目への回答である。唯一、この項目には、学年段階の上昇ともなう値の大きな変動が見られない。この項目への回答が、「ノーテレビ」の意味が把握できずに「わからない」という意味でなされたものな

のか、それとも「ノーテレビ」の試みを感情的に否定する意味でなされたものか、この調査データからだけでは明らかにしえないが、どちらにせよ、学年を問わずある一定の割合で「否定」の傾向があることは注目に値するであろう。

#### (4) 「テレビ依存度」と、子どもたちの日常行動との関係

以上で見てきた、子どもたちのテレビ視聴時間やテレビ視聴に対する態度、および「ノーテレビ」に対する評価は、子どもたちのどのような日常行動と関係しているのであろうか。それを探るために、まず、子どもたちがどのくらい「テレビなしでは生きていけない」状態になっているかを、「テレビ依存度」として数値化した。数値の算出方法は次のとおりである。

- ① テレビ視聴の際の態度：「テレビを見るとき、だらだら見ている」「テレビを見るとき、勉強をしたり、食事をしたりしながら見ている」の各質問への回答につき、「いつもそうしている」に10点、「ときどきそうしている」に5点、「たまにそうしている」に-5点、「ぜんぜんそうしていない」に-10点を与えた
- ② 「ノーテレビ」に対する否定的な評価：土曜日にテレビを見なくなることについて、「困る」「つまらない」「不安だ」「なぜそんなことをするのか、わからない」の各質問への回答につき、「とてもそう思う」

表4 「ノーテレビ」に対する評価（学年段階別）

	土曜日にテレビを見なくなることは・・・						(%)
	困る	つまらない	不安だ	よいことだ	楽しそう	なぜそんなことをするのか、わからない	
小学校1・2年 (N=642)	67.3	63.6	39.1	37.7	20.9	65.3	
小学校3・4年 (N=667)	72.3	67.5	39.9	37.3	17.5	59.7	
小学校5・6年 (N=617)	78.0	69.5	43.6	34.0	13.6	54.3	
中学校 (N=573)	86.4	75.4	45.0	29.1	6.8	63.5	
全体 (N=2499)	75.6	68.8	41.8	34.7	15.0	60.7	

注) 「そう思う」(「とてもそう思う」+「まあそう思う」の合計)の値。

に10点、「まあそう思う」に5点、「あまりそうは思わない」に-5点、「まったくそうは思わない」に-10点を与えた。

- ③ 「ノーテレビ」に対する肯定的な評価：土曜日にテレビを見なくなることについて、「よいことだ」「楽しそう」の各質問への回答につき、「とてもそう思う」に-10点、「まあそう思う」に-5点、「あまりそうは思わない」に5点、「まったくそうは思わない」に10点を与えた。
- ④ 以上、個人ごとに①～③の得点を加算した後、項目数（8項目）で除し、個人得点（-10点～10点）を算出した。この得点の意味するところは、高得点であるほど、生活の中にテレビが根づいてしまっている「テレビ依存度」が高く、逆に低得点であるほど「テレビ依存度」は低くなるということである。

このようにして算出された「テレビ依存度」に基づき、子どもたちをその得点によって低群から高群の3段階に区分した（表5）。以後、主にこの3群の比較を試みる。「テレビ依存度」を学年段階別に示すと、表6のようになる。これ

までの結果からも容易に予想できることであるが、低学年のうちは「テレビ依存度」の低群および中群の割合が多いが、学年段階が上がるにつれて依存度高群の割合が増し、中学生では4割強が依存度高群に位置することが見て取れる。

では、「テレビ依存度」は、現在のX村の子どもたちの日常生活行動とどのように関連しているのだろうか。

まずは、平日、学校から家に帰った後の行動とそれに費やした時間の平均を見てみよう（表7）。「テレビ依存度」高群の「家でテレビを見た」項目の値が高いのは、「テレビ依存度」が高いのだから当然のこととはいえ、低群と比較して約50分も長くなっている。そのほかにも、「テレビ依存度」低群に比べて高群では、時間になるとわずかな差ではあるが、ビデオ、テレビゲーム、携帯電話やパソコンといった電子メディアとの接触時間が長い。また「家でごろごろしたり、ボーっとしていた」時間も、低群に比べて長くなっている。一方で、「家族と話した」「家のお手伝いをした」時間は、「テレビ依存度」低群よりも高群のほうが短くなっている。

土曜日の行動についてはどうだろうか（表8）。平日と同様、「テレビ依存度」高群のテレ

表5 「テレビ依存度」構成比（全体）

テレビ依存度	N	割合（%）
低群 (-10点～0点)	763	33.1
中群 (0.63点～4.38点)	813	35.3
高群 (5点～10点)	728	31.6
合計	2304	100.0

表6 学年段階と「テレビ依存度」との関係  
(%)

	テレビ依存度			
	低群	中群	高群	合計
小学校1・2年 (N=570)	38.2	38.1	23.7	100.0
小学校3・4年 (N=618)	36.2	36.7	27.0	100.0
小学校5・6年 (N=574)	33.4	32.8	33.8	100.0
中学校 (N=542)	23.8	33.4	42.8	100.0

ビ視聴の平均時間は他群に比べて長く、時間というとなら3時間を超える。低群よりも1時間以上も長いという結果である。また、「テレビ依存度」が高いほど電子メディア全般との接触時間が長く、その一方で、家族と話したり手伝いをしたりした時間が短い傾向は、平日の場合と変わらない。加えて、土曜日については「子ども会など、地域の子どもの活動に参加した」時間も尋ねているが、「テレビ依存度」が低いほど、参加時間が長くなっていることがわかる。

なお、付言しておけば、平日においても土曜日においても、「テレビ依存度」がどの程度であろうと、友だちと一緒に外で遊んだ時間は大きくは変わらない。むしろ土曜日に関していえば、「テレビ依存度」が高いほど、その時間が長くなっている。この結果から見る限り、「テレビ依存度」が高い子どもたちは、人間関係が狭い

とか、家に閉じこもってばかりであるとかということとは言えそうにない。このような、一般的に言われていることがそのまま当てはまりそうにない結果からは、テレビは友だちとの会話の潤滑油になり、一緒に外で遊ぶ友だちづくりにつながる、といった見方も成り立ち得るだろう。

X村の子どもの行動と「テレビ依存度」との関係について、もう一点、指摘しておきたい。先に述べたようにX村では、「ノーテレビ」の効果として「思いやりのある子」の育成を挙げ、それを取り組みの目的に掲げている。それでは、この試みが始まった時点において、「テレビ依存度」は、X村の子どもの「他人を思いやる行動」とどのように関係しているのだろうか。表9は、「他人を思いやる行動」の程度を尋ねた7項目（小学校1・2年生は5項目）について、「テレビ依存度」との関係を見た結果

表7 平日の帰宅後の行動時間（平均値／「テレビ依存度」別）

		平日の帰宅後の行動時間 (分)							
		家でテレビを見た	家でビデオを見た	家でテレビゲームをした	家でごろごろしたり、ボーっとしていた	家族と話した	家のお手伝いをした	友だちと一緒に外で遊んだ	ケータイやパソコンで、友だちとメールをした (注)
テレビ依存度	低群 (N=759)	75	8	17	13	64	14	44	2
	中群 (N=808)	99	8	19	17	63	12	47	6
	高群 (N=716)	124	12	25	23	59	10	46	11

注) 小学校3年生以上に対する質問のため、小学校1・2年生を除く。テレビ依存度に対する度数は、低群 (N=541)、中群 (N=592)、高群 (N=582)。

表8 土曜日の行動時間（平均値／「テレビ依存度」別）

		土曜日の行動時間 (分)								
		家でテレビを見た	家でビデオを見た	家でテレビゲームをした	家でごろごろしたり、ボーっとしていた	家族と話した	家のお手伝いをした	友だちと一緒に外で遊んだ	ケータイやパソコンで、友だちとメールをした (注)	子ども会など、地域の子どもたちの活動に参加した
テレビ依存度	低群 (N=763)	110	22	30	28	98	24	92	5	20
	中群 (N=806)	147	29	37	34	99	22	98	9	17
	高群 (N=723)	189	36	56	47	90	20	107	17	13

注) 小学校3年生以上に対する質問のため、小学校1・2年生を除く。テレビ依存度に対する度数は、低群 (N=545)、中群 (N=591)、高群 (N=588)。

である。この結果、どの項目においても、「テレビ依存度」高群より低群の子どものほうが、「他人を思いやる行動」が多くとれていることが明らかであった。特に、「友だち」という具体的で身近な他者に対する行動よりも、「誰にでも」「困っている人」「他の国の人」など、見知らぬ他者に対する「思いやり」があらわれる行動において、「テレビ依存度」低群と高群との差が開いている。この点で、X村が「思いやりのある子」の育成のために「ノーテレビ」を導入しようとするその意図は、的はずれなものではないといえよう。ちなみに、テレビ視聴のメリットとしてよく言われるのは、「テレビを見ることで、画面の向こう側を想像し、見知らぬ他者への関心を高めることができる」ということであるが、この調査では、それを支持するような結果にはなっていない。むしろ、反対の結果が出ていることを付け加えておきたい。

#### (5) テレビ依存の程度と「ノーテレビ」実施後の行動の予測

では、子どもたちの「テレビ依存度」は、「ノーテレビ」実施後に予測される行動とどのように関係するのであろうか。ひいては、X村の「ノーテレビ」は、どの方向に向かうことが予想されるのであろうか。以下、「ノーテレビ」実施後の土曜日に、どのような行動をとるようになるかを問うた質問への回答から、X村における「ノーテレビ」の取り組みの行方を探ってみたい。

なお、当該の質問は小学校3年生以上を対象に行ったものである。その点で、小中学生全体をカバーする結果ではないことを断りおく。

まずは、「テレビ依存度」と「テレビを見ない土曜日は、どんなふうになると考えていますか」という質問への回答との関係である(表10)。概して、「テレビ依存度」高群より低群で、家族や友だちと一緒に過ごしたり、家の外や地域で活動したりするようになるとする子どもの割合が高い。つまり、「テレビ依存度」が低いほど、土曜日にテレビを見なくなった場合でも、家の中にひとりであるのではなく、誰かと一緒に、あるいは家の外へ出て過ごすことを好む傾向にあるといえる。

逆に、「テレビ依存度」低群より高群では、土曜日にテレビを見なくなると、かえって他の曜日にテレビを多く見るようになったり、がまんできなくて土曜日にもテレビをつけてしまったりする、という子どもが多く見受けられる。また、「やることがなくて、ぼんやり過ごす」割合も高く、「がまんできなくてテレビをつけてしまう」ことに次いで高い数値を示している。このことから、高い「テレビ依存」の状態は、テレビ視聴以外の行動を抑制させるおそれがあることが窺える。さらに注目すべきは、「テレビ依存度」高群で、「きつとがまんできなくて、テレビをつけてしまうだろう」とする子どもが95%と、大方を占めたことである。先にも述べたように、X村の「ノーテレビ」は義務や強制では

表9 「テレビ依存度」と「他人を思いやる行動」との関係(「テレビ依存度」別)

		(%)						
		友だちが何かしてくれたら、必ずお礼を言う	友だちが何か失敗したら、励ましてあげる	相手の気持ちをよく考えてつきあう	誰にでも親切にしてあげる	困っている人を見ると、すぐに助けたい	事件のことをニュースで聞くと、どうしてこんなことが起きるのだろうと、あれこれ考える(注2)	他の国の人の悲しいニュースを聞くと、自分も悲しくなる(注2)
テレビ依存度	低群(N=763)	95.5	83.9	79.7	78.4	76.5	60.9	56.5
	中群(N=813)	95.1	80.3	75.5	74.2	69.5	49.0	43.0
	高群(N=728)	92.0	73.6	68.7	62.5	58.7	45.5	35.2
全体(N=2304)		94.3	79.4	74.7	71.9	68.4	51.6	44.6

注1) 「あてはまる」(とてもよくあてはまる) + 「かなりあてはまる」の合計の値

注2) 小学校3年生以上に対する質問のため、小学校1・2年生を除く。テレビ依存度に対する度数は、低群(N=545)、中群(N=596)、高群(N=593)、全体(N=1734)。



ない。テレビの電源を入れれば、当然、テレビを見ることができる。したがって、このような回答があるのは不思議なことではない。とはいえ、「テレビ依存度」高群のほとんどが「がまんできない」と回答していること、さらに言えば、この回答についての「テレビ依存度」低群と高群の値に大きな差があることは、子どもたちの「テレビ依存」の程度が、「ノーテレビ」の試みの成否にも大きく影響を与えるであろうことを示唆している。

加えて、「土曜日にテレビを見なくなったら、その時間を主にどのように使うつもりですか」という質問への回答を見てみよう（表 11）。ここでは、より具体的な行動について、3つまで複数の回答を求めている。

まず、全体を見ると、最も割合が高い項目は、

「友だちと外で遊ぶ」「家族といっしょに過ごす」といった項目である。つまり、土曜日にテレビを見なくなったら、他人と共に過ごすという子どもが多いことが見て取れる。他人と共に過ごすことは、X村における「ノーテレビ」の取り組みによって期待される行動である。この点で、「ノーテレビ」は効果があることが予想される。しかし、「マンガを読む」「家で勉強する」など、家で、ひとりですることの多い行動を示す項目についても、次いで割合が高くなっている。さらに、「やっぱり土曜日でもテレビを見る」という項目についても、テレビ視聴の代替となるであろう「テレビゲームをする」「ビデオを見る」という項目についても、そうするという子どもの割合が少なくない。この点で、映像メディアとの接触を断とうとする「ノーテレビ」の

表 10 「テレビ依存度」と、テレビを見ない土曜日の行動予測との関係

(%)

		テレビを見ない土曜日は・・・(小学校1・2年生を除く)						
		家族と一緒に過ごす時間が多くなるだろう	友だちと一緒に過ごす時間が多くなるだろう	家の外で、いろいろなことをするようになるだろう	地域でのさまざまな活動に参加するようになるだろう	やることなく、ぼんやりと過ごすことになるだろう	他の曜日に、いっぱいテレビを見るようになるだろう	きつとがまんできなくて、テレビをつけてしまおうだろう
テレビ依存度	低群(N=545)	79.8	62.4	72.8	34.1	23.3	17.6	40.0
	中群(N=596)	70.6	61.4	66.4	23.0	44.3	38.4	79.4
	高群(N=593)	59.5	59.2	62.6	16.9	63.1	54.1	95.8
全体(N=1734)		69.7	61.0	67.1	24.4	44.1	37.3	72.6

注) 「そう思う」「とてもそう思う」+「まあそう思う」の合計の値。

表 11 「テレビ依存度」と、テレビを見ない土曜日の時間の使い方の予測 (単位: %)

(%)

		土曜日にテレビを見なくなったら、その時間を主にどのように使うつもりですか (小学校1・2年生を除く、3つまでの複数回答)											
		友だちと外で遊ぶ	家族といっしょに過ごす	マンガを読む	家で勉強する	テレビゲームをする	やっぱり土曜日でもテレビを見る	寝たり、ごろごろと過ごすしたりする	読書したり、新聞を読んだりする	ビデオを見る	おけいごをする	塾へ行く	ボランティアをしたり、地域で活動したりする
全体(N=1734)		57.9	53.0	31.3	29.4	29.2	28.1	22.3	22.1	12.7	6.7	3.1	2.4
テレビ依存度	低群(N=545)	60.0②	69.4①	20.9	43.7③	18.2	7.9	14.9	35.4	7.5	7.9	3.9	4.2
	中群(N=596)	56.9①	53.7②	34.2③	27.7	29.4	23.7	22.3	21.3	12.6	7.2	2.7	2.0
	高群(N=593)	54.6①	35.1	36.8	16.9	37.9③	49.9②	28.3	9.8	17.0	4.7	2.7	1.0

注1) 項目は、全体の回答が多かった順に、左から並び替えてある。

注2) 回答者数の後の丸数字は、それぞれの群において回答が多かった順(1位から3位まで)を示している。

試みには困難が予想される。

一方、最も割合が低かったのが、「ボランティアをしたり、地域で活動したりする」という項目で、複数回答であるにもかかわらず、わずか 2.4%のみであった。X村の「ノーテレビ」では、この試みによって、子どもたちが積極的に地域での活動に参加していくことが想定されている。しかしこの結果から読み取れるのは、その想定が「想定」に終わりがかねない、というおそれである。子どもたちは「地域で活動すること」に魅力を感じていないようである。おそらく、そのことの具体的なイメージを持ちあわせていないのであろう。「ノーテレビ」を実施したとしても、子どもたちが地域での活動を始めるとは考えにくい結果である。

次に、「テレビ依存度」別に見た結果に着目しよう。低群・中群においては、「ノーテレビ」で空いた時間は家族や友だちと一緒に過ごす、という子どもの割合が、他の行動に比べて高い。この結果から、こうした子どもたちに関しては「ノーテレビ」の効果がかなり期待される。しかし高群に目をやると、1位に「友だちと外で遊ぶ」が位置するものの、2番目には「やっぱり土曜日テレビを見る」が、次いで「テレビゲームをする」が位置している。さらに、「やっぱり土曜日テレビを見る」の項目（表中の網かけの部分）に着目し、各群を比べてみると、低群・中群に比べ、高群の割合が圧倒的に高い。このことから、「テレビ依存度」高群にとっては、まさに「テレビに依存している」と言わざるを得ない状態であることが明らかである。この点でも、「テレビ依存度」の高さが、「ノーテレビ」の実施に困難を招くであろうことが、あらためて確認されよう。

#### 4. おわりに

本稿では、X村における「ノーテレビ」実施直後に行われた調査の結果を用いて、X村の子どもたちのテレビ視聴の実態を明らかにし、子どもたちの「テレビ依存度」から、「ノーテレビ」の試みの見通しについて検討を行った。その結果、子どもたちはかなり「テレビ漬け」になっ

ており、しかもその程度は学年が上がるにつれて強くなっていることが明らかになった。さらに「テレビ依存度」が高い子どもほど「ノーテレビ」に馴染みにくく、この試みが期待するような行動をとらない傾向にあることもわかった。その点で、X村の構想する「ノーテレビ」の実施には、難しさが見て取れた。また、テレビを見ないことで空いた時間を地域での活動に向けるという「ノーテレビ」の想定についても、そうした志向を持つ子どもたちの少なさから、その実現が危ぶまれることも明らかであった。

最後に、以上の結果から、X村における「ノーテレビ」の試みについて、いくつかの課題を指摘しておきたい。第一に、学年が上がるにつれて「テレビ依存度」が増すことについて、どのように対処するか、ということである。本稿ではとりあげなかったが、高校生対象のデータからはさらに深い「テレビ漬け」の状態が窺えた。中学生・高校生ともなると、見たいテレビ番組は増える一方である。テレビだけにとどまらず、他の映像メディアとの接触も多くなる。このような環境のなかで、年齢の高い子どもたちに対する「ノーテレビ」の理解や普及をどのようにすすめていけばよいかは課題である。

第二に、「テレビ依存」の程度の高い子どもたちへの対処の工夫である。本稿で明らかにしたように、「テレビ依存度」の高い子どもほど、土曜日にもテレビを見てしまったり、たとえテレビを見ないとしても、テレビゲームやビデオなど他の映像メディアに代替を求めてしまったりするなど、「ノーテレビ」の試みが浸透しにくいことが予想される。こうした「テレビ依存度」の高い子どもたちへは、他の子どもたちとは異なったフォローが必要だと思われる。

第三に、より幼い子どもたちの問題である。本稿では就学前の子どもたちとテレビとのかかわりについては論じなかった。しかし、子どもたちのテレビとのかかわりは、いまや生まれた直後から始まっていると言われている。実際、同時期にX村で行った乳幼児の保護者対象の調査によると、子どもたちの約3分の2は、1歳になるまでにテレビを見始めている。いや、「見

せられ始めている」というのが正しいのかもしれない。どちらにせよ、子どもたちがごく幼い頃から「テレビ漬け」になっていることは、紛れもない事実である。X村では「2歳までは完全ノーテレビ」「2歳以上は時間を決めてテレビ視聴」などを提唱しているが、このような取り組みのもとで子どもたちが育ってこそ、「ノーテレビ」の試みは功を奏するであろう。

第四に、子どもたちを育てる大人の問題である。いくら子どもたちに「ノーテレビ」を叫んだところで、一緒に生活し、子どもに影響を与える存在である大人がテレビを見ているのでは説得力がない。大人もテレビを消し、子どもと一緒に時間を過ごすこと、これがX村の求める「ノーテレビ」の本質なのである。また、子どもたちが土曜日にテレビを消して、その時間を大人たちと一緒に行動したいと思っけていても、当の大人が仕事を休んで子どもたちと共に過ごす時間を確保できなければ、期待される効果は薄いであろう。ここでは簡単に触れるにとどめるが、今回の調査結果によると、父親や母親が土曜日に仕事をしている子どもたちの場合、「テレビを見ない土曜日は、家族と一緒に過ごす時間が多くなる」とは思いにくいようである。「ノーテレビ」の成功は、大人の協力なしには困難なのである。

最後に、地域での受け皿の確保を課題として挙げておきたい。テレビを見ないことによって空いた時間をどう過ごせばよいか、慣れるまでは子どもたちも大人たちも困惑するであろう。子どもたちの現状からみても、地域で活動しようという志向はあまり感じられない。こうした困惑に対処し、子どもたちの地域活動への志向を強めるためにも、魅力ある地域活動の機会と場を用意することが必要だと考える。X村における「ノーテレビ」は村をあげての取り組みである。であればこそ、そのメリットを活かし、魅力ある受け皿、すなわち地域活動の機会と場を用意することが求められるのである。

X村の「ノーテレビ」の取り組みは、現在も進行中である。「ノーテレビ」には、息の長い取り組みである必要と、そうならざるを得ない側

面とがあり、今後、この取り組みがどのような展開を見せるのか、注目される。また、その展開には、先ほど指摘したような課題を、この試みがどのように組み込んでいくのかが関係しており、その点でも興味深い。今後、X村では、この取り組みに関する追跡調査がなされるはずである。X村の取り組みとその行方に注目しつつ、検討を続けていくことが、研究としての今後の課題である。

#### <引用・参考文献>

- 日本子どもを守る会編（2004）『子ども白書2004』、草土文化。
- 日本子どもを守る会編（2005）『子ども白書2005』、草土文化。
- X村青少年宣言推進委員会（2003）『X村青少年育成プラン【行動計画編】 ～今、やること～』。
- X村企画総務部自治推進課編（2004）『広報X』、2004年2月10日号。

#### 注

- （1）本調査は、X村からの委託を受け、X村青少年宣言推進委員会と筑波大学教育社会学研究室および筑波女子大学（当時、現・筑波学院大学）社会力育成研究会（研究代表者：門脇厚司）が共同で実施した。なお、同時期に、X村のすべての保育所・保育園と幼稚園に通う乳幼児の保護者を対象に、乳幼児期におけるテレビとのかかわりに関する調査（有効回答数：927）も実施しているが、小学生～高校生対象の調査とは内容が大きく異なるため、本稿の分析の対象とはしなかった。
- （2）中学生の回答数が、学年によって大きく異なっているのは、持ち帰りによる記入のために回収率が低くなったためと考えられる。

付記：本稿の執筆に際しては、X村青少年宣言推進委員会と、筑波学院大学・門脇厚司先生に調査データの使用を快諾いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

**The Actual Conditions of Children's TV Viewing and the Problems of  
"No-TV challenge":Based on the Survey for the Children in the Village  
People Try "No-TV challenge"**

Hiromi ENDO

The purpose of this paper is to clarify the actual conditions of children's TV viewing and their attitude to "No-TV challenge," and to consider the prospects and the problems of this attempt based on the survey for the children in the village people try "No-TV challenge."

"No-TV challenge" is an attempt to propose that it should be turned TV off in districts or schools. X village began "No-TV challenge" at Saturday from 2004 and proposes spending time with family. The attempt is aimed at increasing time for children to interact with others instead of the time to be in contact with visual media. As a result, children will have consideration for others.

The survey was executed as questionnaire for all children in 6 primary schools and 2 junior high schools in X village at April 2004. This paper analyzes 2499 children's data.

The findings are;

- (1) Children are dependent on the TV as a whole, and besides, the dependency become higher as children grew up.
- (2) Children who have a high tendency to depend on the TV don't try "No-TV challenge" and don't take behavior this attempt hopes.

Thus X village's "No-TV challenge" attempt will be hard. In addition, children who will act in community are very few, so this attempt is doubted.

The problems which X village's "No-TV challenge" attempt have are following;

- (1) To devise the way of understanding this attempt for babies, infants and children who had grown and who have the high dependency on the TV.
- (2) To make adults understanding this attempt.
- (3) To arrange for the occasion in which children want to participate in their community.